

馬（うま）にまたがる八条様（はちじょうさま）

（八条）

八条（はちじょう）の入谷（いりや）に、八条殿社（はちじょうでんしゃ）といわれるお社（やしろ）あとがある。

今（いま）から750年（ねん）まえごろ、八条様（はちじょうさま）が京都（きょうと）から、この入谷（いりや）に流（なが）されてきた。八条様（はちじょうさま）は、左大臣（さだいじん）にもなられたりっぱな公家（くげ）であった。何（なに）かふしまつをしてかしたのだろう。こんなかたいなかではさびしくいつも馬（うま）にのっていなさったそうなの。

八条様（はちじょうさま）が狩衣直衣（かりぎぬのうし）を着（き）て、馬（うま）にまたがり走（はし）るもんだから、里（さと）の娘（むすめ）っこたち、それは一おおさわぎしたそうなの。

八条様（はちじょうさま）がおのりになる馬（うま）は、白馬（はくば）であった。馬（うま）におのりになるおすがたはりりしかった。馬（うま）でとおのりをなさると、中川（なかがわ）のふちで馬（うま）を洗（あら）ったそうなの。

そしてさびしくおなくなりになった。里人（さとびと）は、八条様（はちじょうさま）をまつるお社（やしろ）をたてて霊（れい）をおなぐさめした。そのお社（やしろ）を、八条殿社（はちじょうでんしゃ）というんだそうなの。

八條良輔は、藤原兼実（太政大臣）の三男で、鳥羽天皇第三皇女八條院の養子となり、左大臣（1212-18）になられた方であった。その良輔が『新編武蔵風土記稿』に「八條殿社、塚上ニ社ヲ建、……一説ニ月輪太政大臣兼実ノ三男義輔罪アリテ当国ニ左遷シ此地ニテ逝セシカハ、其靈ヲ祀シト」記されるように、古くからの伝承である。史実では、八條良輔領の下河辺荘に隣接していることと、八條の地名が良輔の性と同じこと等から、八條殿社に付会され伝承されてきたものと思われる。

馬場（ばんば）のお諏訪様（すわさま）

（中馬場）

中馬場（なかばんば）のお諏訪様（すわさま）は、お産（さん）の神様（かみさま）といわれていてね。

むかし、なんでも信州（しんしゅう）の住人（じゅうにん）に高梨仲光（たかなしなかみつ）という侍（さむらい）がおった。戦乱（せんらん）であればた郷里（きょうり）をすて、武州八条（ぶしゅうはちじょう）の馬場（ばんば）に宿（やど）をとった。

その晩（ばん）、宿（やど）の女房（にょうぼう）が産床（さんどこ）にむかい、難産（なんざん）で苦（くる）しんだ。仲光（なかみつ）は、何（なん）とかしてやろうと思（おも）い、自分（じぶん）の肌守（はだまもり）の諏訪明神（すわみょうじん）を臼（うす）の上（うえ）にまつり、安産（あんざん）を願（ねが）った。

ただちに靈験（れいげん）があらわれ、子（こ）が生（うま）れた。夫婦（ふうふ）は、お諏訪様（すわさま）の神慮（しんりょ）を喜（よろこ）び、高梨氏（たかなしし）の逗留（とうりゅう）を願（ねが）った。

高梨仲光（たかなしなかみつ）は、ついに馬場（ばんば）に住（すま）いをかまえ、堀切仲光（ほりきりなかみつ）と名（な）を変（か）えた。

そこで延徳（えんとく）3年（ねん）（1491）に妙光寺（みょうこうじ）の日正上人（にっしょうしょうにん）と相談（そうだん）をして、信州（しんしゅう）の諏訪明神（すわみょうじん）を勧請（かんじょう）し、お社（やしろ）をたてた。守護神（しゅごしん）は、諏訪神社（すわじんじゃ）の諏訪像（すわぞう）の胎内（たいない）に安置（あんち）し祀（まつ）った。

諏訪大明神（すわだいみょうじん）のご利益（りやく）をもって、馬場（ばんば）の地（ち）では、難産（なんざん）になるかたが一人（ひとり）もなかった。それを聞（き）いて、近郷（きんきょう）の人々（ひとびと）も、お産（さん）をする者（もの）はお参（まい）りをし、社地（しゃち）の土（つち）を持（も）ち帰（かえ）って安産（あんざん）を願（ねが）うようになったそう。

この話は、中馬場妙光寺（日蓮宗）の『武州埼玉郡八條領中馬場長光山妙光寺鎮守勧請諏訪大明神縁起』と伝承をもとに作話した。妙光寺蔵の縁起絵巻は年欠となっているが、安永四年（1775）の『諏訪大明神略縁起』（石井家文書）と同文なので縁起内容は近世中期に成立していたものと思われる。斎藤月岑『武功年表』によると、弘化四年（1847）五月より「浅草寺町大仙寺にて、武州馬場村諏訪明神開帳」と見えることから、諏訪神像の出開帳を行ったことがわかる。中馬場諏訪神社は産神として信仰され、古くは安産祈願のお砂取り用の絵皿（妙光寺蔵）も出されるほど名を馳せていた。延徳三年（1491）に祭祀された上馬場の諏訪社は、当地方の諏訪信仰の伝播を知る手懸りとなる。

八条（はちじょう）と新方（にいがた）の合戦（かつせん）（八条・小作田・大曾根）

八条（はちじょう）に八条惟茂（はちじょうこれしげ）という武将（ぶしょう）がおり、八条領（はちじょうりょう）をおさめていた。八条領（はちじょうりょう）は元荒川（もとあらかわ）をさかいにし、新方領（にいがたりょう）と接（せつ）しておった。その新方領（にいがたりょう）には、新方頼希（にいがたよりき）という領主（りょうしゅ）が向畑城（むこうばたけじょう）に住（す）んでおり、八条氏（はちじょうし）と新方氏（にいがたし）がなかがいをし、戦（いくさ）となった。

文亀（ぶんき）4年（ねん）（1504）正月（しょうがつ）に八条惟茂（はちじょうこれしげ）は、八条領（はちじょうりょう）の武将（ぶしょう）をひきつれて新方領（にいがたりょう）へせめいった。これを聞（き）いた新方頼希（にいがたよりき）は、さっそく早馬（はやうま）で家来（けらい）をあつめ、向畑城（むこうばたけじょう）を出馬（しゅつば）した。勝（かち）いくさで進（すす）んでいた八条氏（はちじょうし）と小林（こばやし）であいたいした。

ここで数日間（すうじつかん）ほど戦（たたか）い、地（ち）のりをえた新方勢（にいがたぜい）は、八条勢（はちじょうぜい）を追（お）いくずした。勝（か）ちにのった新方頼希（にいがたよりき）は、大将（たいしょう）みずから八条勢（はちじょうぜい）を追（お）った。あまり深追（ふかお）いし、ついに流（なが）れ矢（や）にあたり落馬（らくば）し、命（いのち）を落（お）とした。

大将（たいしょう）が落命（らくめい）した新方軍（にいがたぐん）は敗（はい）たいをし、向畑城（むこうばたけじょう）をあけわたした。

八条惟茂（はちじょうこれしげ）は、八条（はちじょう）と新方（にいがた）の領（りょう）をあわせおさめ、向畑城（むこうばたけじょう）を一族（いちぞく）の別府三郎左衛門（べっふさぶろうざえもん）に守（まも）らせた。

新方氏（にいがたし）の残党（ざんとう）がりをした八条氏（はちじょうし）は、いきようようと八条（はちじょう）へがいせんした。

八条氏（はちじょうし）にほろぼされた新方頼希（にいがたよりき）の兄（あに）に、清浄院（しょうじょういん）の高賢上人（こうけんしょうにん）がおった。高賢上人（こうけんしょうにん）は、八条氏（はちじょうし）を新方領（にいがたりょう）からおいだし、お家（いえ）の再興（さいこう）を願（ねが）った。永正（えいしょう）17年（ねん）（1520）10月（がつ）、新方氏（にいがたし）にえんある武者（むしゃ）をあつめ、八条氏（はちじょうし）の家臣（かしん）で向畑城（むこうばたけじょう）を守（まも）る別府三郎左衛門（べっふさぶろうざえもん）に夜（よ）うちをかけた。ふいのため八条氏（はちじょうし）はまけいくさとなり、別府三郎左衛門（べっふさぶろうざえもん）はふたことめもいわず討（う）ち死（じ）にした。

八条惟茂（はちじょうこれしげ）は、新方氏（にいがたし）のひきょうな夜（よ）うちを聞（き）いて怒（おこ）り、八条（はちじょう）のつわものを集（あつ）めた。先陣（せん

じん)に青柳外記(あおやぎげき)と小作田隼人(こさくだはやと)、柿木大膳(かきのきだ
いぜん)ら 850 人(にん)、二陣(にじん)に大相模飛驒守(おおさがみひだのかみ)と西
脇左近右衛(にしわきさこん)えら 500 人(にん)、本陣八条惟茂(ほんじんはちじょうこ
れしげ)は 1,000 人(にん)をひきつれ、別府(べっふ)へ出陣(しゅつじん)した。永正
(えいしょう) 18 年(ねん) (1521)1 月(がつ) 7 日(にち)に新方領(にいがたりょう)
へ総攻撃(そうこうげき)をかける手(て)はずをととのえ別府(べっふ)で前祝(まえい
わい)をしやすんだ。

またしても夜半(やはん) (6 日)、ひきょうにも新方勢(にいがたぜい)が夜(よ)うち
をかけてきた。八条勢(はちじょうぜい)の別府(べっふ)や青柳(あおやぎ)、柿木(かき
のき)らの軍(ぐん)は総(そう)くずれとなった。八条(はちじょう)が叔父大曾根上野
介(おじおおそねこうずけのすけ)も大相模(おおさがみ)へ出陣(しゅつじん)しており、
別府(べっふ)のいへんに気(き)が付き、かけつけたが、手(て)のくdashようもなかつ
た。八条(はちじょう)の総大将八条惟茂(そうだいしょうはちじょうこれしげ)の馬(う
ま)の足(あし)が切(き)られ、自害(じがい)せんと狂(くる)うおりながら、小作田
隼人(こさくだはやと)が駆(か)けつけ、おのれの馬(うま)に主(あるじ)をのせて、
八条(はちじょう)の方(ほう)へおとしてやる。小作田隼人(こさくだはやと)は、ここ
より一歩(いっぽ)も八条(はちじょう)の方(ほう)へは近付(ちかづ)けぬとふん戦(せ
ん)したが、根(こん)つきてうたれた。敵(てき)も味方(みかた)も小作田隼人(こさ
くだはやと)の晴(はれ)なる勇姿(ゆうし)をほめたたえた。

越谷市大松の清浄院(浄土宗)に嘉永四年(1851)転写の『六ヶ村栄広山由緒
著聞集』なる文書がある。その文書は、天正十八年(1590)の記録を「大杉郷川
上宗甫」が転写したおり、戦記としてまとめたものであろう。この戦記本に登場
する武将は、八潮地方の地名を名のる八条・小作田・大曾根・青柳・柿木・新方・
別府・大相模・西脇(西方)などの武士名がみえる。江戸時代後期になると、室町
期の戦記本が多数発行され読まれるようになる。それらの戦記本に目を通した川
上宗甫が天正十八年の古記録をもとに、新方周辺地域の戦記本の説話を創作した
ものと思える。

もうせんに、じい様（さま）に若柳（わかやなぎ）の地名（ちめい）を聞（き）いたことがあったっけ。

その昔（むかし）、権現様（ごんげんさま）（徳川家康（とくがわいえやす））は会津（あいず）の上杉景勝（うえずぎかげかつ）を征（せい）ぼつに出（で）かけた。それは、上杉景勝（うえずぎかげかつ）が石田三成（いしだみつなり）と通（つう）じて、家康様（いえやすさま）をのけものにしようとしたためじゃ。下野（しもつけ）の小山（おやま）まで出兵（しゅっぺい）した時（とき）、石田三成（いしだみつなり）が京（きょう）の伏見城（ふしみじょう）をせめた知（し）らせを聞（き）くと、兵（へい）をまとめ江戸（えど）へ帰（かえ）ろうとしたそうなの。

下妻街道（しもつまかいどう）を下（くだ）り江戸（えど）へ向（むか）うとちゅう、二丁目（にちょうめ）で昼飯（ひるめし）をつかわれた。食事（しょくじ）をとり終（おわ）ったあと、しげしげ箸（はし）をみながら、長（なが）い時間（じかん）をかけ戦略（せんりゃく）をおたてになっていた。とつぜん箸（はし）をば地（ち）にさして、

「俺（おれ）が天下（てんか）をとれば、この箸（はし）が芽（め）を出（だ）す。天下（てんか）をとれねば芽（め）がでぬ。」

といい放（はな）ち、馬（うま）にまたがり江戸（えど）へお帰（かえ）りになった。そして関ヶ原（せきがはら）の合戦（かつせん）にのぞまれたそうなの。村人（むらびと）は毎日（まいにち）毎日（まいにち）、権現様（ごんげんさま）の箸（はし）を見（み）に来（き）たそうなの。権現様（ごんげんさま）が箸（はし）をさし、1か月（げつ）ほど過（す）ぎたころ、箸（はし）から柳（やなぎ）の芽（め）がふいた。それを見（み）た村人（むらびと）は、権現様（ごんげんさま）が天下（てんか）をとったことを知（し）り喜（よろこ）んだ。それから若柳（わかやなぎ）と呼（よ）ぶようになったそうなの。

徳川家康（1542－16）が関八州を治め、江戸を居城としたのが天正十八年（1590）である。当地方には、家康が元和二年（1616）に亡くなる二六年間の畏敬の伝承が多い。地名に因むものは、「鶴ヶ曾根」「若柳」、鷹狩りは「オオギョウ塚」「御成道」「鶴塚」（下木曾根）、寺院関するものは「西勝院」「西連寺」などに、権現（家康）伝承がある。それらの多くは中川沿いに分布し、市西部には少ない。伝承は家康の神号である東照大権現の“権現様”と、親しみで呼ばれる。さらには、信仰対象として祭祀された権現社が、八潮第二小学校の校地内に祀られているなど、徳川家康の崇拜伝説が各地に分布する。

わたしが子（こ）どものころ、下二丁目（しもにちょうめ）の西蓮寺（さいれんじ）さんをお茶屋寺（ちゃやでら）とよんでいたんだよ。

むかし権現様（ごんげんさま）というえらい將軍様（しょうぐんさま）がおってこの付近（ふきん）でお鷹狩（たかがり）をなさったんだ。そのおり、西蓮寺（さいれんじ）さんに立（た）ち寄（よ）ったんだってさ。

きゅうのおこしで、うろたえたのは坊様（ぼうさま）だ。田舎（いなか）もんのことだからどうもてなしていいかわかんねーから、寺（てら）じまんの井戸水（いどみず）さー、さしあげることにしたんだ。

「田舎（いなか）ゆえにこの寺（てら）にはなんにもありませんが、田舎（いなか）の水（みず）はたとあります。」

とさしだしたんだと。

権現様（ごんげんさま）は、その水（みず）っこを「ゴクン、ゴクン」と、のどをならしながら飲（の）み、

「この水（みず）は、そち方（かた）の水（みず）か。どうして味（あじ）が良（よ）いのか。」

と、お聞（きき）になったんだと。

日（ひ）ごろ、ツーといえば、カーというもの知（し）りでおっている坊様（ぼうさま）だが、「うめーから、うめーんだ。」とは、答（こた）えられねーで、口（くち）こっさーつまっちゃまった。

「この井戸（いど）は寺（てら）のたつみにあります。川（かわ）の水（みず）がやっばらにしみこみ、茅（め）が水（みず）をこしてくれるので、味（あじ）がよくなります。」

と、お答（こた）えしたそうな。すると、

「もういっぱい所望（しょもう）することにして、井戸（いど）から川（かわ）にむかって一町（いっちょう）の茅野（かや）のは、そち寺（てら）の寺領（じりょう）とせよ。」とお命（めい）じになられた。そして寺領目録（じりょうもくろく）を書（か）いてくださったんだと。

その後（ご）も、代々（だいたい）の將軍様（しょうぐんさま）がこの付近（ふきん）でお鷹狩（たかがり）をすると、西蓮寺（さいれんじ）さんのお水（みず）をおつかいになったそうな。それから、お茶屋寺（ちゃやでら）と呼（よ）ばれるになったんだとよ。

下二丁目西連寺（浄土宗）の本寺は、小金東漸寺であった。その『檀林小金東漸寺志』に末社の由緒が記される。寺誌には「神祖（家康）台祖（秀忠）猷祖（家光）御鷹野度々入御寺水の井の清水を被賞…（中略）御殿寺とも或は御茶屋寺と申」などと記されていた。当地方は徳川家の鷹場であったために將軍の鷹狩りが行われた。そのおりは西連寺の井戸水が飲料水となり、茅野一町ほどが寺領として与えられた。今はその当時の井戸は遣っていないが『檀林小金東漸寺志』と下二丁目地区から採録した伝承をもとに説話を構成した。